

菊池 明郎 KIKUCHI, Akio

71年社会学科卒（14期）

ICUの教育、そしてキャンパスの環境などに憧れ ICUを第一志望で受験し、何とか入学できたと記憶している。丸山圭三郎、田川健三など当時の若手の優秀な先生方に授業を受けたことが、つい昨日の出来事のように思える。

就職する際には、どうしても出版の仕事につきたいという強い意志を持っていたわけではなく、大企業に入るよりも、好きな本に囲まれてのんびり人生を送ればいいかな程度の考えで筑摩書房に入社した。出版営業の仕事がどのようなものかも全く知らず、先輩に連れられて見習い営業マンとして学校や図書館に本を売り込みに行ったとき、物を売ることの大変さを初めて知った。何年かして営業の仕事に慣れてきたころ、行動力と体力に目をつけた編集部長に引き抜かれ、全国各地の美術館や博物館をカメラマンと共に取材し、写真をたくさん使った本の編集をする仕事を経験した。出張も多く残業も多い仕事だったので、自分が引っ張られた理由が良く分かった。

この仕事もこなせるようになったとき、筑摩書房は倒産した。1978年のことだった。会社更生法の適用が決まり、会社の再建が本格的に始まるに当たって、営業部長から営業に戻って販売課長として先頭に立って頑張ってほしいと言われた。倒産原因の一つに無理な営業活動もあったという思いがあったため、自分なりの改革案をペーパーにまとめたのだったが、それを読んだ営業部長が、この方向でやってみてくれと私に言った。再建には10年以上の時間がかかったが、昨今の5%前後くらいしか負債を返さない民事再生の事例とは異なり、負債を全額返済したことが、私たちのささやかな自慢だった。

1999年3月私の前任の社長が退任表明をしたとき、社長のなり手が誰もいないという事態が生じた。サラリーマン社長が何年か交代で任に当たるというやり方をしていたのだが、当時出版不況が始まっており、金融機関等に連帯保証をしなければならない社長を買って出る者は皆無だった。やむなく私が手を挙げて新たな船出が開始された。就任1年後には「金持ち父さん 貧乏父さん」がミリオンセラーとなって、筑摩書房は順調な歩みを開始した。不況が進行する前に、高価な全集等は売れ行きが落ちると予測し、早い時期に文庫や新書の創刊に乗り出したのだったが、この方針は大正解だった。全国のどの書店でどの本が毎日何冊ずつ売れているかというデータを収集し、解析を行い適正な数の本を送本するやり方を、出版業界の中では早く採用したことも経営を安

定させるのに役立った。経営基盤が安定すると質の高い出版企画が生み出され、読者の方々からも高い評価を頂戴した。

また私は出版業界のインフラ整備にも業界の仲間と共に加わり、日本書籍出版協会の副理事長を長く務めた。具体的には「著作物再販制度」を新しい時代に合わせたものとする活動や、出版の電子受発注システムの構築などに当たった。現在は図書館界と出版界が連携し、読書環境を整え、これから時代を担う若い人たちにもっと本に親しんでもらうための活動に従事している。

鵜浦 - タナカ 真紗子 UNOURA-TANAKA, Masako

79年語学科卒（22期 旧姓：鵜浦 昌子）

あの日、あのとき 1000 年に一度の未曾有の東日本大震災の発生時刻午後 2 時 46 分、私は母の生まれ故郷の気仙沼市内におりました。マグニチュード 9.0 の大揺れの後、混乱の中、恐怖感や目前に迫ってきた津波に翻弄されながら、動物的な本能が作動したのでしょうか、私は次々と生きるすべが鮮明に浮かんできました。海岸方向に向かって通り過ぎようとした青年に声を掛けた途端、「僕について来てください」と、静かに一言。直観が全てでした。その青年の背中を追ってアパートの屋根、そして最終的にドラッグストアの屋根により登り、九死に一生を得たのです。福島出身の渡邊大輔さんが命の恩人でした。

余震の続く闇夜の中、次第に近づいてくる大きな炎や雪の気配に震え、怯えながらも、他方、極めて冷静な自分がいて、必要最小限の行動を心掛けました。「神さまは乗り越えられない試練はお与えにならない」という内からの声に、「きっと大丈夫よ」と言い聞かせていました。気仙沼で救助され、実家の大船渡に戻った後、直ちに通訳としてボランティアに携わりました。オランダから成田に到着後、困難を極めても諦めずに大船渡入りした医療機関の男女 4 名と捜索救助犬 2 匹に同行して、消防関係者、自衛隊員と共に廃墟と化した実家や近隣の大船渡町内で、3 月 26 日まで遺体捜索に参加しました。

その後、交通網が遮断されて被災地での隔離状態から太平洋の対岸で私の帰りを待つ夫に会えたのは、4 月も半ばの頃でした。夫にとっては、「妻の生還」でした。高齢の父を伴って一次的な海外避難でしたが、数日後、日本への募金活動の会場で、突然、ロサンゼルス郡消防団特殊部隊の一員に目を奪われました。同部隊一行は、震災直後、48 時間以内に青森県米軍三沢基地経由で大船渡に派遣されていたのです。誰もが予期せぬ出来事だったので、会場の参加者一同が驚きと感動に沸いた瞬間、その部隊の指揮官だった消防士ラリー・コリンズ氏と抱き合い、お互いに涙しました。偶然とは思えない大船渡市への人道支援活動に、言い尽くせない感謝と絆の賜物を感じました。

実は、今回の大震災以外に昭和 35 年 5 月のチリ地震津波が発生した早朝、私は家族と共に避難、気仙沼で避難生活をした経験があります。昨年 2 月に 93 歳で他界した父は、岩手県陸前高田市と大船渡市を襲った大津波で、幼い頃から三度も苦い思い出があり、「地震が発生したら、直ぐ逃げろ！ 決して、自然を侮るな、自然と共存」が口癖で、自然界の猛威に常に謙虚でした。

「二度あることは三度ある」の諺どおりであるならば、私の三度目の震災体験は太平洋の対岸の地であるかもしれません。大船渡への支援活動を継続する中で、いつかカリフォルニア州で起こるかもしれない自然災害の為に、自ら行動しようと決意しました。毎年 3 月、自然災害に対してより高い意識を持ってもらう為に、多くのボランティアと共にロサンゼルス市

警察本部を会場に、米国市民が一堂に会し東日本大震災犠牲者の為に祈りを捧げ、地元消防署や警察の協力を得て、自然災害への備えや心構えを共有しています。今後、日本の高度な防災技術や経験が世界各地に及ぼす影響は計り知れなく、多大な貢献をすると確信しております。東日本大震災の教訓を生かして、国際的かつ横断的にあらゆる天災や災害に関する交流や国際訓練が確立することを願ってやみません。

最後に、ICUとの出会いについて。クリスチャンの母の勧めで英語を教えていただいた大船渡教会の中条先生の奥様の鈴枝さんが国際基督教大学の一期生でした。その後、仙台市内の高校在学中に大船渡ロータリークラブより交換留学生として米国のオレゴン州で過ごし、帰国後、母と同じく気仙沼ご出身で後に ICU 高校の初代校長になられた大内謙一先生のお宅に泊めていただき、雪の降る中、受験した 44 年前の日のことを鮮明に覚えています。父が大船渡で開業した産婦人科医院で赤ちゃんの産声が聞こえる賑やかな環境で育ち、卒業後も三人の弟妹がいても親離れしない長女は、太平洋を越えた熟年見合い結婚でしたが、子供が授かっていたら、間違いなく母校を推薦したでしょう。還暦も過ぎて、今年 6 月 16 日には卒業 40 周年目の記念会が開催されるので、同級生の皆さんとの再会を心待ちしております。震災後、ICU 仲間のまとめ役として坂本穰治さんが、東京から大船渡支援の為に何度も来てくださいり、有志の皆様からの募金で軽自動車を寄贈してくださいました。あらためて、皆様にお礼申し上げます。

この度、尊敬する母校の同窓会から栄誉ある DAY 賞を頂き、こころより感謝申し上げます。諸先生方はじめ素晴らしい同級生や先輩達に恵まれ、IUC 卒業生であることに誇りと責任を感じて卒業後の人生を歩んで参りました。ありがとうございます。同窓会や選考委員会、大学関係者の皆様にもお礼を申し上げます。

追記：大船渡支援や訪問された ICU 関係者のお名前を思い出せる範囲で記させていただきます。

(敬称略・順不同)

ID:77—坂本穰治、平林美枝子、源実・(清水)由理子(ID:80)

ID:78—石川博紳、吉川(伴野)弘子、柳下(山田)宙子、乙部尚子、西尾隆・朋代、丸橋(妹尾)由起子、矢嶋(加藤)牧美、渡辺守雄、水戸孝道、岸本(日下野)裕子、小林(古坂)牧子、青木(堀田)眞理、讚井(熊倉)暢子、西野桂子、瀬川秀剛、川岸(齋藤)麗、鈴木保人、秋岡(永田)寿美子、森村(国守)成子、霜永(千葉)洋子

ID:79—鈴木律、秋元(川原)みゆき

ID:02—加藤龍蘭

岡田彰、高橋力、諸橋岩男、森田なほ子、井下原百合子、浅田明日香、坂本あけみ、村上世博、浅川礼、河辺亮輔

青木 重人 AOKI, Shigeto

89年社会科学科卒（33期）

この度は、栄えある DAY 賞にお選びいただき、誠にありがとうございます。このような栄誉は自分に縁のないものかと思っておりましので、受賞の連絡を受けて、唯々驚いております。受賞者の中でもビジネスマンゴルファーの活躍に着目していただいたのは極めて稀だと思いますが、ご推薦、ご選考くださった皆様に厚く御礼申し上げます。

私は偶然早朝のテレビ中継を見て、マスターズ（オーガスタ）の美しさと、そこでプレーするマスター達に魅せられて、11歳でゴルフを始めました。途中小中高と野球・バスケットボール等もやってみましたが、ハマったのはゴルフでした。

私をはまらせたゴルフの面白さは、思い通りのショットが打てたとしても、その直後には、更にもっと良いショットを目指したことです。コツコツ練習に励むことで、ショットも良くなり、飛距離も伸び、スコアも少しずつ良くなりますが、その瞬間からまた更に上達したいという意欲が湧いてくるものです。言い替えると「一つの課題を克服すると、また次の課題が見えてきて、その課題を克服すると、また次の課題が・・・」というようゴルフは「永遠の課題に取組む、終わりなきスポーツ」であると思っています。

競技としてゴルフに本格的に取り組んだのは、カリフォルニア・クレアモント市で過ごした高校時代だと思います。アメリカではシーズンスポーツとして、秋シーズンはアメフト、冬シーズンはバスケット、春シーズンにゴルフをしていました。授業が終わると毎日3時頃から近くのパブリックコースで練習、ラウンド、試合に取り組み、競技ゴルフにはまつていったのを覚えています。

高校卒業後、ICUに入学したきっかけは、「ゴルフ場を持っている」と聞いたからでした。しかし、残念ながら、いざ入学してみると、その頃「ゴルフ場」は既に「野川公園」になっていました（笑）。ICUにはゴルフ場はなかったものの、ICUゴルフ部に入部し一番の喜びは、「ICUのゴルフ部員は語学ができる」ということで、来日した海外ツアープロの通訳やアテンダントのアルバイトができたことです。そのアルバイトの時間は振り返ってみると、海外のトッププロ選手にとても近い位置で技術や考え方を学ぶことのできた貴重な時間だったと思います。

ICU卒業後は三井不動産に入社し、20代は業務多忙でゴルフからは遠ざかっておりましたが、1997年からシンガポール、2005年から上海に駐在したことをきっかけに、再びゴルフからは離れられない生活を過ごすこととなりました。特にシンガポールでは政治家もビジ

ネスマンとゴルフをするので、週末は殆どゴルフ場で過ごしていました。ゴルフはスポーツでありながら、ビジネスのフィールドでは仕事だけでは普段接することができない社内外の方々ともお知り合いになる機会ともなります。さらに、ゴルフを通して出会う人々とは、長時間一緒にラウンドすることにより、仕事だけの関係より多くの時間を共に過ごし、様々な会話をすることで濃厚な人間関係が構築できるということを実感し、今でもシンガポールや上海での縁を大切にしています。

学生時代に10年、社会人になってから30年とゴルフ歴約40年になりましたが、私はゴルフのおかげで今の自分があると思っています。ゴルフを通じて広がった人脈。出会った人々から学び、広がった自分の視野。紳士のスポーツといわれるゴルフルールからは社会人としてのエチケットやマナーも身につけることができ、競技として取り組んだことで、決断力・精神力も鍛えられたと思っています。まさにゴルフはビジネスマンが総合的に洗練されるツールのひとつなのかもしれません。

昨今ゴルフ人口が急速に減少していることをよく耳にします。特に20～30代の人口が減っていることをとても残念に感じます。日本では、若い層が始めやすい環境を整える必要もあると思いますが、個人的には何はともあれ皆さんに一度ゴルフクラブを握ってみてほしいと思っております。ゴルフは必ずあなたの人生を豊かにしてくれるスポーツであると信じています。